

セカイは
WOW! で
満ちあふ
れている

セカイ
に
nijiiro sekai





そんな女の子が描く絵とカラフルな色は、街のみんなにも大評判！

似顔絵、お花、動物、おもちゃから、なんだかわからないものまで、
リクエストがあればなんでも描いてあげます。

絵を描いてあげるとみんな笑顔！

ある日近くに住む大好きなおばあちゃんの家に遊びに行きました。

「おばあちゃん、こんにちは！」

「いらっしゃい、ワウ」

「あら、洋服に色がついちゃってるわよ。今日も絵を描いていたの？」

「そうなの！今日はおばあちゃんの絵を描いていたのよ」

そういうってワウはおばあちゃんに絵をプレゼントしました。

「まあ！ありがとう、とてもよく似ているわ。さあさあ、おあがり」



おばあちゃんの家には大好きな絵本がたくさん！

「絵本図書館みたい。」

絵本を選ぶのがおばあちゃんの家にくる楽しみのひとつ。

「今日はどれにしようかな…」

ワウは一番はじっこにあった、古くて色のない絵本を手に取りました。



「色はないけどとっても素敵な絵本！」

ワウはたくさんの動物たちが出てくる
その絵本をすっかり気に入ってしまいました。

「でも、私だったらこの動物たちに色を付けてあげるのにな」

ワウがその絵本に色を塗ろうとすると・・・



「カー！ カー！」

絵本の中からカラスたちが急に飛び出していました。





ワウはびっくりして
持っていた絵本を投げ出してしまいました。

その瞬間まわりが真っ暗になり、
ぐるぐる回りながら穴に吸い込まれていきました。

「わ～～！ 目が回る～～！！」





「ここはどこ…？誰かいるの？」

気がつくと、ワウは色のない絵本の世界へ迷い込んでいました。

不安と恐怖でいっぱいになり、涙があふれてきました。

「でも泣いていたって、お家へ帰れない！」

ワウは筆と絵の具を持って、森の奥へと進んでいきます。

「あ！さっきみた絵本の中のくまさん！」

おそるおそる近づくと、くまはびっくりした顔でワウに言いました。

「君はとても綺麗な色をしているね。ぼくも、ぼくらしい色で、綺麗な花を大好きなあの子に渡せたらなぁ・・・」





「色がほしいのね！私にまかせて。」

ワウは持っていた絵の具と筆で、くまに色をつけてあげました。



「なんて、素敵な色！」

くまはみるみるうちに笑顔になり、
どんどん勇気が湧いてきました。

△ ▽
「ありがとう、これであの子に気持ちを伝える事ができるよ。」

そしてワウが綺麗に塗ってあげたお花と一緒に、
大好きな子の元へと向かいました。



さらに進んでいくと、今度は色のないフラミンゴに出会いました。

「こんにちは」

「こんにちは、カラフルなお嬢さん。」

フラミンゴはいいます。

「以前は、私がデザインした洋服でたくさんの人を魅了してきたの。

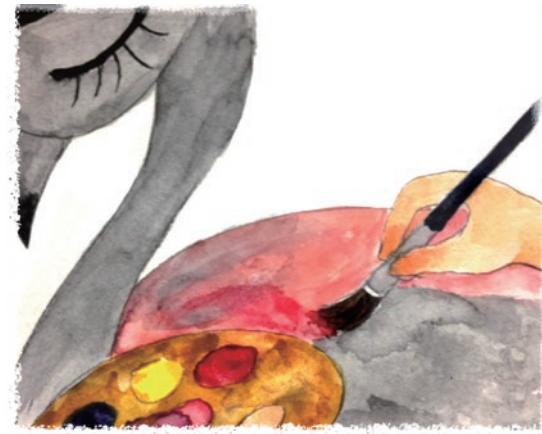
私もそんな素敵色があったら、またあの頃のように輝けるかしら ...」





「私が色をつけてあげる！」

ワウは筆と奇麗な色をたくさん取り出し、フラミンゴに塗ってあげました。



「ありがとう！なんだかどんどんアイデアが浮かんできたわ！

また素敵なデザインが作れる気がする！」



色を塗って喜んでもらえたワウは、自分も嬉しくなってきて、どんどん森を進みます。

すると、今度は川が見えてきました。

「なんで君はいつもそうなんだ！」

「なんだって、君の方こそ！」

川をのぞくとたくさんのサカナ達が言い争っています。





「みんなにも色を塗ってあげる、そしたらきっと仲良くなれるわ！」



「僕たち、こんなに似た者同士だけど、みんな違った魅力があるよね！」
「ありがとう、君のおかげでなんだか仲良くなれそう気がある！」



サカナ達はあっという間に笑顔になって、ワウにお礼をいいました。

サカナ達にさよならをし、さらに進んで行くと、こんどはキリンの親子に出会いました。

「キリンさん、こんにちは」

「まあ、とっても素敵な色の女の子！」

お腹に抱いたキリンの赤ちゃんを見ながら、お母さんは言いました。

「この子のためにも、もっと笑顔でいたいのだけれど…」





「まかせて、キリンのお母さん！」

そういうってワウは、赤ちゃんとお母さんに色を塗ってあげました。



「こんなに綺麗な色を、私たちにありがとう。

この子もとっても嬉しそう！」



綺麗な色をもらって、キリンの親子はあっという間に笑顔になりました。



動物たちとわかれると、ワウはまた歩きだしました。

だんだんと森の奥へ進むにつれ、

うっそうと茂っていた木々は枯れ、

辺りは薄暗くなっています。



「ようこそ、色のない世界へ」

薄暗がりの中、木の上から声がしました。

ワウが目を凝らすと、そこには一羽の大きなカラス。

「ぼくは君と同じ世界からきたカラスなんだ」

「こっちの世界なら真っ黒でも誰も気にしない... ほんとは僕もたくさん色があったらうれしいのに...」

でも、僕はカラス... もともとこの黒い色なんだ」



うなだれるカラスにワウは言いました。

「やってみないとわからないわ。
わたしが色をつけてあげる！」



一色、また一色と新たな色が塗られていくと、
すべての光を吸いこんでいくかのように真っ黒だったカラスの体が、
きらきらと光り、辺りを照らし始めました。





うなだれるカラスにワウは言いました。

「やってみないとわからないわ。
わたしが色をつけてあげる！」

一色、また一色と新たな色が塗られていくと、
すべての光を吸いこんでいくかのように真っ黒だったカラスの体が、
きらきらと光り、辺りを照らし始めました。



カラフルに彩られた羽は大きくひろがり、まるで虹のようです。





カラスが大きな羽を広げて飛び回ると、薄暗かった森の中が明るく輝きました。

赤・青・白・黄色・緑・オレンジ・紫・・・あらゆる色があふれかえる森は、宝石箱のよう。



「ありがとう、君のおかげでぼくの夢が叶った！
色のチカラってすごいんだね！」

悩みを解決した動物達も集まつきました。
カラス「さあ、お礼にみんなでパーティーだ！」



「なんてうつくしい世界なんだろう」「お祝いのパーティーをしよう！」

ワウと動物たちは、カラフルな森にめいっぱいの飾りつけをして、ごちそうを用意しました。





ほんとうに楽しいパーティーでした。
みんなが笑顔で歌ったり踊ったり。



どうぶつたちと楽しい時間をすごしたワウは
疲れて瞼が重たくなってきました。
とても楽しい一日で、とても良い夢が見られそう。
そっと目を閉じたワウに、動物たちがやさしく毛布をかけてくれました。

ワウが目覚めると、そこは森の中ではなく
よくみなれた景色の自分の部屋。
「あれ？ 全部夢だったの？」





でも女の子の口元にはあまいケーキのかけら。
「夢じゃなかった！」

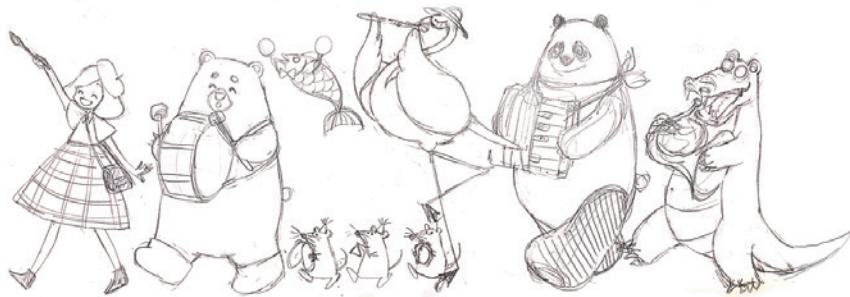
あなたの



色

はなんですか？

あなたの
未来に
Happyを



あなたの未来をはじめよう
カズミア株式会社

Kazmia

お電話でのお問い合わせ・ご相談

046-200-7158

営業時間 10:00~19:00 土日祝休み

打ち合わせはオンラインでも対応可能です

